



Title	日本学学生企画セミナー「阪大で原発について語る会」報告
Author(s)	柿田, 肇
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 113-121
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/25559">https://hdl.handle.net/11094/25559</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本学学生 企画セミナー 「阪大で原発について語る会」\*報告

柿 田 肇



### はじめに

2011年3月11日の東日本大震災にともなって発生した福島第一原子力発電所の事故は、国際原子力事象評価尺度でレベル7というもっとも高い段階の評定が暫定的になされるなど、日本の内外に憂慮をもたらした。そしてこれと同時に、それまで原発の立地にかかわる特定の地域と結びついたものとして、あるいは、ある種の政治的な行動とみなされがちであった反原発運動が、一挙に日本社会のあり方自体への問いかけとして浮上した感があった。それは多くの人びとが、事故現場の過酷で危機的な状況の報道にくぎづけになったことにはじまり、放射性物質の外部環境への大量放出と広範な拡散や、それにとまなう農・畜産・漁業産品などの汚染という事態に遭遇したこと、さらには識者や政府による情報の確度や偏向の可能性を疑うようになったこと、そしてなによりも福島第一原発周辺の被災地での苦悩——居住地や耕作地の放棄・制限や除染作業の難しさ、震災と原子力事故の二

---

\* 「阪大で原発について語る会」実行委員会主催。講師に小林圭二氏（元京都大学原子炉実験所講師）をお招きして、2012年6月25日に大阪大学豊中キャンパスで開催。実行委員は、柿田肇・荒川理沙。

重の災禍という底の見えない深刻な状況——を知ったことによって、原子力発電のリスクにかんして社会全体で検討するべきであると考えはじめたという点に起因していたといえるだろう。

## 開催までの経過

前記のような3・11後の原発に対する再審の機運のなかで、社会のさまざまな場所で意見が出され論議を呼んだが、日本学研究室所属の学部生・院生を中心に、学生を主体にして原発問題について討論する場を〈大学〉につくろうという声があがった。そして、原発問題に関心を寄せる学内外の人文系および理工系の数人の研究者を支援メンバーにして、そのための具体的な検討に入ることになった。

企画にかかわる有志によるミーティングをへて、名称を「阪大で原発について語る会」とし、講師に小林圭二氏（経歴は後述）を招聘すること、会場は大阪大学豊中キャンパス構内に設け、学生だけではなく一般にも公開すること、一方向的に講師の話を書く講演会形式ではなく、小林氏と参加者との対話型の会にすることが決められ、また参加者も特定の信条や運動にかかわる人に偏らないことが望ましいとされた。

2012年3月14日には、学生有志や支援メンバーに小林氏を交えて日程調整のほか、当該イベントの方向性や、さらに原発問題について意見交換をおこなった。

この会合では小林氏に対して、原発（事故）にかんする技術的な、また原子力利用の史的展開についての質問がおこなわれたほか、運動における研究者の位置づけ、あるいは理系と文系の連携と断絶などをめぐって、小林氏と会合参加者とのあいだで活発なやりとりがあった。このなかで小林氏が〈60年安保〉当時の「別個に進んで一緒におこなう」という意識が見なおされてもいいのではないかと述べたことは示唆に富み、また印象的だった。

その後、日程・会場の調整をおこない、2012年6月25日（月）午後4時40分から、豊中キャンパス構内にあるスチューデント・コモンスのセミナー室において開催することになった。また、日本学研究室であたらしく設けられた日本学学生企画・補助金に助成申請し、これを認められた。

開催日の前週や直前には、情宣活動として阪大豊中キャンパス構内でビラまきもおこなった。なかには足を止めてイベントについて尋ねる人も複数いた。また構内数か所にポスターを掲示したほか、文学研究科、人間科学研究科内の複数の研究室へも当該イベントの情報を告知した。

下記に示したものは、〈阪大で原発について語る会・実行委員会〉を主催者として「お知らせ…阪大で原発について語る会／NO GENPATSU, NO NIPPON?／ノー原発の日

本?????」というタイトルを付して配布したビラ（部分、一部編集）である。なお、学内外はもとより学生・大学人と一般の人びとを問わず、広く開かれたイベントを目指すために、同ビラ末尾に「事前申し込み不要。どなたでも自由にご参加いただけます」と明記した。後半部には小林氏の経歴も載せているので参照されたい。

◆2011年3月11日の東日本大震災から一年以上たちました。

そして、同時に発生した、あの福島第一原子力発電所の事故からも。

◆原発をめぐる議論は、想定を超える事故のリスクと、電力不足によるリスク評価との堂々めぐりのまま閉塞しています。

◆もちろん、そうした議論を遠くで眺めていては安心することはできません。

そこで、大学というさまざまな知識や関心をもった人がいる場所で、一方的な解説ではなく、みんなで考えましょう、というのがこの企画です。

・考える上では、技術論、開発史、反原発運動など、さまざまな切り口があると思います。といっても、なにか確固とした意見を参加される皆さんに求めているわけではありません。

・わたしたちのなかに湧き上がってくる問い、たとえば「再稼働したほうがいいの?」「除染ってなに?」、そうした「わからない」「知りたい」ということを含めて、まず話し合ってみたいのです。

ゲスト——小林圭二さん（元・京都大学原子炉実験所講師）

プロフィール 1939年中国大連市生まれ

京都大学工学部原子核工学科卒業後、京都大学原子炉実験所助手をへて講師、2003年同所を定年退職／日本に原発がまだ一基もなかった頃、将来のエネルギー源の夢を抱いて原子力開発の研究者の道に入る。60年代末、社会に対して加害者となっていた科学技術やそれらを担う大学を鋭く告発した学生による全共闘運動の刺激を受け、次第に原子力に疑問を抱くようになる。1973年、日本で最初に起こされた原発訴訟、四国電力伊方原発1号機訴訟に、反対住民の支援で参加したことを契機に、反原発に転じる。／1985年に提訴された高速増殖炉もんじゅ裁判では原告住民側の証人と特別補佐人を務め、約20年にわたり関与した。／主な著書 『高速増殖炉もんじゅ 巨大核技術の夢と現実』（七つ森書館）、『原発の安全上欠陥』（共著、第三書館）、『プルトニウム発電の恐怖』（創史社）など

開催をまえにした6月16日、政府は関西電力大飯原子力発電所3・4号機の再稼働を7月におこなうことを決定した。これにかんしては、連日報道がなされて人びとのあらたな関心事となったが、かかる情勢のなかで当日を迎えた。

## 2012年6月25日「阪大で原発について語る会」を開催

当日の構成を下記に示す（入場・午後4時40分、予定開始時刻・午後4時45分）。

### 第1部 原発問題——原発の〈いま〉と〈これから〉…おもに技術的な観点から（60分〔予定〕）

- (1) いま何が起きているのか
- (2) これからなにが起こるのか、なにを防ぐべきなのか

### 第2部 原子力史——技術と政治…おもに社会的な観点から（60分〔予定〕）

- (1) 開発史と個人史
- (2) 運動とはなにか？

### 第3部 質問、自由討議（50分〔予定〕）

〈第1部〉ではまず、司会（実行委員会・柿田）の紹介をうけて、小林氏が「福島事故の技術的な細部について議論する会ではなく、事故がもたらした社会的な影響とか活性化された反原発運動の流れなど、運動面にかなり力点を置いて話す会と理解している」と述べるとともに、自身が「直近の大飯3・4号の再稼働問題では、運動の作り手というかたちで動いている」ことが語られた。



講師の小林圭二氏

つぎに、運動を考えるうえでも必要な基礎的な知識という観点で「原発はなぜ危険か」ということが詳説された。原子力発電のもととなる核分裂連鎖反応の応用の仕組みからはじまり、核分裂生成物質という存在、「放射線の危険性」として放射線被曝が人体へ及ぼす障害へと懇切な解説が進められた。

ついで、原子炉の種類、発電の仕組み、スリーマイル島原発事故の事例解説、大飯原発の構造上の問題や安全上の不備な点などが指摘された。運転停止後も残される「死の灰」としての放射性物質の問題も論及された。

さらに福島事故の現状が解説されるとともに、事故後の「避難の遅れ」や適切さを欠いた避難対策にも言及された。また企画段階から関心が寄せられていた「除染」という問題にも見解が示された。他方、被災地や現場の作業員の被曝制限の引きあげ再設定にも触れ

られた。〈第1部〉の「むすび」のスライドに書き込まれた「原発は弱い立場の人たちを差別し犠牲にしなければ成り立たない／（過疎地域住民、下請け労働者など）」ということばからも、小林氏の問題意識の一端を垣間見る思いがした。

〈第2部〉については、主催者から原子力の開発史と小林氏の個人史とを重ねて話しをしてほしいという要望が事前に出されていた。これに沿って、氏がかかわってきた運動にかんしても話してもらうことになった。

まず、原子力利用の前史として核兵器開発のことが語られた。そのつぎに、日本の原子力（開発）史として、1954年の原子力利用に対する初の予算化、そののちの原子力基本法成立といった一連の流れが解説され、さらに小林氏の個人史が重ねられて概ね以下のことが語られた。

1959年に小林氏は京都大学工学部原子核工学科（58年設置）に入学した。64年には京大原子炉実験所助手に就く。一方、66年に日本初の商用炉（東海1号）が臨界に達している。

「原子力発電はクリーンエネルギー」という宣伝がおこなわれた時期があったが、このころに原発推進の専攻という立場から反原発運動への転機が訪れた。高度経済成長のなかでの「矛盾」が表出した公害の時代に、「技術者・研究者の社会的責任を鋭く告発した」全共闘運動が原子力専攻の学生のあいだにも起こった。運動の焦点は各地での原発の建設問題だった。当時、全共闘運動のなかから全国原子力科学技術者連合（全原連）が結成されたが、小林氏は創設メンバーであり、氏の運動の出発点はここにある。その一方で、将来は原子力の利用上の問題も技術的に克服できると「まだこのとき幻想をもっていた」。なぜ「幻想がはがれたか」といえば、あとからふり返ってみると全共闘運動で使われた「専門馬鹿」ということばによる。専門に明るいだけで「全体像」を見おとしてしまうことへの批判が、このことばに込められていた。1973年からの四国電力伊方原発の住民訴訟で他の専門分野の人びとに出あったことが、「専門馬鹿」を自覚させそこから抜けだす契機になった。しかし一方では、原子力研究者として自身の方向性に逡巡する時期があり、高速増殖炉研究に携わったこともあったが、このことは結果的にはのちの〈もんじゅ〉の裁判で役立った。

枯渇する「石油の代替エネルギー」としての原子力という宣伝の時期ののちに、「エネルギー安全保障」という触れこみで原子力が宣伝される時期（80年代）が来たが、同時期にチェルノブイリ原発事故（86年）が発生した。チェルノブイリの例と同根の事故が生じる危険性が〈もんじゅ〉にあるにもかかわらず、その点を日本では省みられなかった。1980年代末以降は、「地球温暖化対策」として炭酸ガスを排出しない原発の有用性が謳われる。

このような時系列での原子力の利用と小林氏の個人の歩みとが述べられたあと、日本の反原発運動の流れを3期に分けたうえで、運動について話が深化していった。以下にまた小林氏による解説の概略を記す。

第1期は各地域での反原発運動であり、「基本的に建設反対運動」と位置づけられる。地域の労組や全原連の学生の支援がみられたが、運動の成否としてはどちらもあった。他方で、最終的には建設された大飯でも二次にわたる強固な反対運動が起こった。しかし、どこであれ建設反対運動という性格から、建設されると状況が変化してしまった。

第2期の特徴は、チェルノブイリ事故が契機となって起こった都市住民によるもののみられる。それは既存の原発に対しての抗議・反対運動だった。しかしながら、グループが細分化してしまうとともに、専門分化で大衆性を失っていった。

福島事故の発生後は第3期として、全国的な「廃炉運動」が広がっていかなくてはならないと思っているが、それが胎動しはじめている。そこに希望をもちたいと思っている。その一方で克服すべき「障壁」「課題」もある。グループごとの反原発・脱原発への「こだわりの壁」（活かすべき特徴にもなるが）がみられることや、新旧グループの「温度差」があることを「乗りこえなくてはならない」。

上記のように、これまでの運動にかんする小林氏の解説が進んだが、もっとも重要なのは「現地の運動と都市消費地の運動とのつながり」であり、「これがなければ廃炉はできないと思う」という見解が示された。その理由は、現地が「経済・政治・文化的に推進側にかんじがらめに結わいつけられている」ことにあるとし、状況を切り開くために「現地のなかから自ら声をあげるようにしなければならない」ことが言及された。そして、現地の人びとが運動の担い手になるには、都市の住民側の支持・支援がなければ困難であるとの認識を示したうえで、「大きなうねりを作って（略）いわば下から変えていく」ことが必須であり、上からの改革だけでは結局は大きな資本に絡めとられてしまう、との付言があった。当面の課題としては、原発の再稼働の阻止、原発稼働ゼロ状態の維持があげられた。

〈第3部〉では、質問および自由討議をおこなうということで、富山一郎氏（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）をコーディネーターに、参加者が小林氏を交えて自由に質疑や討論できる場を設定した。

最初に富山氏が、ここでのテーマをなにかに絞るということではないと前置きしたうえで、組織動員ではないかたちでみられる現在の反原発デモのように「流動化」する運動形態という従来にはない展開が生じるなか、これらをふまえて参加者のそれぞれの思いや考えを出してほしい——それらは、もとより「結論があるわけではない」——と述べたほか、このイベントを〈大阪大学〉という場所で実施できた意味についても考えたいとして、以上の2点を提起した。

参加したある阪大大学院生からは、マス・メディア批判や「阪大の学生は問題意識がない」などという意見があった。社会人からは、日常接する人びとのなかに、教育水準にもとづく階層性によって原発問題に関心をもつ／もたないという壁があるように感じるといふ実感が寄せられるとともに、反原発グループごとの差異はどのようにあるのか、協同の可能性はどうか、という質問があった。

質問に対して小林氏は、グループごとの違いは存在してきたが、「福島事故が(そうした)垣根を否定なく取りはずしつつあるというのが事実」と答えた。つづけて、以下のように語った。実地での抗議行動ではグループによって「運動論が違う」が、両者を「橋渡しをする」者によって以前なら「つながらないような」グループ間が結ばれるようになった。その役目は「まったくあたらしく運動に加わった人が担える」。政党・党派をこえた統一行動は大阪ではまだできないが、京都など3・11を契機にうまくいった地域もある。現状としては市民レベルの運動が中心になっている。

ほかの参加者からは、原発反対であるが、どこまで反対であるのか、あるいは容認しているのか、いまは自問してしまう状態にあることが述べられる一方、反原発の講演会に行っても大学生ぐらいの若年者がきわめて少ない点が指摘され、教育に課題があるのではないかという提起がなされた。

富山氏からは、いまの状況は「一斉にある種の困難」があらわになると同時に、多様な可能性も噴出しているのではないかと。これまで世代や経験によって分かれていたことが「織り合わせる」ようにもなってきたのではないだろうか、という意見がだされた。

前記とは別の大学院生は、最近の反原発デモに参加した経験から、デモの参加者が増えたことは評価できるが、依然として大阪ではデモに対する「ひややかさ」「関心の低さ」も感じると指摘した。

これらをうけて小林氏は、直近の大阪の関電前でのデモに集まったといわれる1500人という数は「大きい」とし、古くからの運動の枠を「完全にこえている」と思うと述べるとともに、自主的に集まったという点で評価すべきあたらしい動きだと指摘した。

以上が、「阪大で原発について語る会」の当日の様様だが、上記のほかにも示唆に富む意見や、やり取りがあったことを付記しておきたい。

なお、この日の参加人数は27名であった。

終了後に小林氏と希望者で食事を交えた交流会を設け、和やかな雰囲気の中さらに意見交換ができた。

※当日の様様は記録ビデオと配布したレジュメを参照して柿田が再録・再構成した。

## イベントをふり返りながら、おわりに

前述のようにイベントの冒頭で、小林氏は「福島事故の技術的な細部について議論する会ではなく、事故がもたらした社会的な影響とか活性化された反原発運動の流れなど、運動面にかなり力点を置いて話す会と理解している」と述べた。これを聞いて、これまでとは異なる会を企画してきたわたくしたち主催者は非常にうれしく思ったが、ディスカッションの時間が十分とはいえなかった。これについては主催者側、とくに時間の設定をした柿田に責任がある。そのほか、情宣活動は十全とはいえず、ツイッターなどの活用があればより多くの参加者が望めたかもしれない。また学内での効果的なポスター掲示など情宣の方法をより工夫していたら、阪大生の参加がもっと増えたと思う。以上を反省材料としてここに記しておく。

福島第一原発の事故から20か月たった現在（2012年11月）でも、事故によって心身両面で多数の人が傷ついたままである。もちろん人びとが受けた痛苦は大震災の影響を抜きにしては語れないが、震災被害の克服にとってもこの事故は計り知れない影響を与えている。歴史的経験という文脈でいえば、福島事故は1945年8月の広島、長崎での原子爆弾による被爆に次いで日本社会が直面した大規模な原子力による災禍といえることができる（このことは、戦災を災害と等意とするわけではない。またこの間の「第五福竜丸事件」も原水爆禁止運動のひとつの契機として、大きなインパクトをもたらしている）。しかしまた、これらが日本社会を直撃した事態だとしても、そこから生じる問題は、単に「日本人」に限られたものではない。まず問われるべきなのは、この社会に住むすべての人びとの生存にかかわる問題であり、そのような問題が解決されるためには、提供される情報においても受けることができる支援においても、「日本人」である／ないにかかわらず、罹災した人びとのあいだに格差がないようにしなければならない。この点は強調しておく必要がある。そして、いずれの専門領域かを問わず、社会に対して向きあい、こうした格差をなくすように働くことこそが、〈大学〉に課せられた使命なのではないだろうか。そうした働きとは、たとえば、人びとにとって有用な、あるいは必要な知の成果を、社会のすみずみまで流通させることを可能にするように、さまざまなことばに翻訳すること（翻訳とは、対象を外国語に限ったものではない。アカデミックなことばを日常のことばに置き換えることも含まれるだろう）などである。社会に向きあったときに〈大学〉が、あるいは研究者が従うべき倫理。わたくしたちが〈大学〉でこのイベントをおこなった意味も、いまふり返ってみればそうした点に深くかかわっていた。小林氏が「研究者としての社会的責任」を取戻しようと運動に身を投じ、分断されたコミュニティのなかで、弱められ、行き場がない人びとに真摯に向きあってきたことを知ったことで、わたくしたちは多くを

学んだ。これから、社会にどう向きあうべきなのかという問いに対しては、わたくしたちがそれぞれの責務を自覚することを起点にして答えていきたい。

**【追記】**

講師を引きうけていただいた小林圭二先生には、事前のミーティングにもお越しいただき、さらに多忙なかで詳細なレジュメとスライドを用意され、当日には懇切な説明や応答をしていただきました。ここに、心よりの敬意を表し、感謝を申し上げます。

〈第3部〉でのコーディネーター役を快諾していただいた富山一郎先生にこの場を借りてお礼申し上げます。

また、開催にあたって温かく見守り、支援していただいた日本学研究室の諸先生方に感謝いたします。

支援メンバーとして協力・助言いただいたみなさま、献身していただいた実行委員の荒川理沙さん、快くご助力いただいた大阪大学の学部生・院生のみなさま、開催にかかわっていただいたすべてのみなさまに感謝申し上げます。

（かきた はじめ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）